

ステイホーム！でもつながろう、自然と仲間と希望と！

コロナ禍で生まれた希望への学び「CONNECTEDkind」^{コネクティッド・カインド}

はじめに

バルト三国の1つにラトビアという人口 200 万人ほどの国がある。面積は日本の6分の1ほどの小さな国である。18世紀からロシア領となり、1918年によりやく独立を果たすものの、1940年代以後、半世紀にわたりソ連の軛（くびき）のもとに置かれ続けた歴史をもつ。1990年には独立回復を宣言し、その後、EUやOECDにも加盟して続いている。

独立に向けた民衆運動である「バルトの道」は感動的な実話である（YouTubeで“The Baltic Way”の検索で閲覧可）。1989年8月、バルト三国の人々がソ連からの独立を求めて立ち上がり、約600キロメートルにわたり手と手を繋いで「人間の鎖」をつくり、非暴力の抗議を行った。赤子を抱いた母からお年寄りまで老若男女、総勢200万ほどの人々が共に半世紀も禁じられていた母国の旗を掲げて国歌を歌い、圧政に対して「ノー」という意思表示をしたのだ。インターネットのない時代の出来事であるが、この平和裡に遂行された出来事はラトビア、リトアニア、エストニアというバルト三国の結束と自由な社会への希求を世界に示した民衆史の一里塚であると言えよう。

「バルトの道」に参加して「これからは小さな国が世界平和に向けたリーダーとなる」と確信した少女がいる。その少女の名はラウラ・ベレーヴィチャ。当時、7歳であった彼女は成人して建築家となり、現在はロスアンジェルスを拠点に幅広い活動を展開するアーティストとして、またアカデミー映画博物館（Academy of Motion Pictures）の展示デザイン部長（Director, Exhibition Design）として活躍している。ベレーヴィチャ氏が国際的にも知られるようになったのはコロナ禍においてであった。筆者もフィンランドの友人を通じてコロナ禍で苦しむ多くの人々に喜びと希望を与えているラトビア人アーティストがいるという話を聞き、彼女が創始した「コネクティッド・カインド（以下、CONNECTEDkind）」というアクティビティを知るに至った。

CONNECTEDkind とは

CONNECTEDkind が生まれたのは2020年3月14日。新型コロナウイルスが世界を席卷し始め、ロスアンジェルスでも学校閉鎖が報じられた時であった。当時、ウイルスが蔓延するのと同時に米国社会ではアジア系の人々への差別や嫌がらせなども広がり、社会全体に暗い影を落としていた。そんな情勢下で、ベレーヴィチャ氏は自身の3人の子ども達と2年間ほど楽しんでいた遊び、すなわち落ち葉や小枝など、地面に在る自然物と影の写真を撮り、それを元に想像した絵を描くというアクティビティを、分断していく世界に向けて発信することを決意した。

このアクティビティは CONNECTEDkind と名付けられ、その解説には次のように書かれている。「コロナ禍においてはステイホームと言われる。でも、気づいた大切なことがある。それは、つながりながらステイホームするということ。自然と、感情と、相互に、私たちの夢とつながりましょう。(In times of chaos we must stay safe, but I realized we must stay connected with nature, emotion, each other and our dreams!)」解説の中の自然・感情・相互・夢はいずれも、現代人、特に都会でせわしく暮らす人々がないがしろにしがちな要素である。さらに後述するように、「影」とも前向きにつながるところがこのアクティビティの醍醐味である。CONNECTEDkind を通して、近代化やグローバル化の過程で現代人が失ってきた関係性を取り戻すことにより、大人も子どもも元気になり、ウェルビーイング、つまり心身ともにより良い状態になるというベレーヴィチャ氏の確信は徐々に国境を越え、2021年5月30日にはユネスコのESD (Education for Sustainable Development) for 2030のイベントの一環として持続可能な未来に向けた学びとして国際ワークショップ「CONNECTEDkind: The Art Vaccine for a Sustainable Future – CONNECTEDkind」が開催されるに至った。

想像力を駆使する

CONNECTEDkind を実際に体験してみると、楽しく奥深い「遊び」であることが実感できる。ベレーヴィチャ氏が言うとおりに、本来、誰もがアーティストであり、このアクティビティを通して自分の中のアーティストを発見し、自分ならではの表現を他者と分かち合うことができ、新たな気づきと内発的な喜びを得ることができるのである。

詳細は別のチャプターに委ねるが、手順はいたってシンプルだ。まず、道端でも公園でも雑木林でも良いので、地面に落ちている自然物を見つける。それを写真に撮り、その写真から想像するものを描く。ただ、このときに自然物の影も一緒に撮影しなくてはならない。なぜなら、CONNECTEDkind の真髄は影からポジティブなものを創造する過程にあるからだ。

例えば、ある人は道端に落ちている枝を山として描くが、別の人は熊として描いたりする。はたまた森で見つけた枯れ葉が人によっては虫になったり、魔女になったりする。写真1で例示したのは、筆者がコロナ禍の時、大学院のクラスで毎回、授業開始時に行った CONNECTEDkind の作品例である。森の案内人として知られ、写真家でもある小西貴士さんが森で見つけられた「さや」とその影の写真(左から二列目の上段)から、「微笑む姉妹」や「哀しげな乙女」「八頭身の美女」、「2羽の鳩を飲み込んだ大蛇」などが生まれる。ベレーヴィチャ氏はこれらの作品をドロップレット (droplet)、すなわち「雫 (しずく)」と呼んでいる。

何に見えますか？

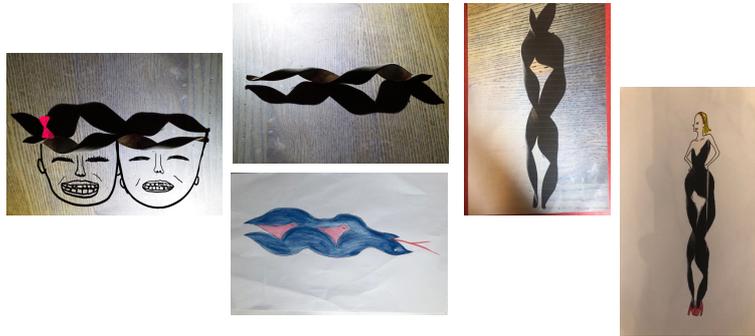


写真 1 :CONNECTEDkind で描かれた「影」

大学の授業での試み

2020年の春学期は新型コロナの感染が広がったため多くの大学でひと月前後遅れの授業開始となり、学生たちは経験のない不安を感じていた。そこで筆者は「ステイホーム！でもつながろう！」(Stay home, but stay connected!) を合言葉に自主授業を10人ほどの学生たちとスタートさせた。すると、不安げだった学生たちの顔は徐々に明るくなり、月曜朝の授業時間であったことも功を奏して1週間をポジティブに過ごそうという意欲が湧く、と感謝された。

秋学期には、コロナ禍で世界が分断される中、社会の中の「影」を捉え直すテーマが社会学にとって格好のテーマとなったこともあり、このアクティビティを50人ほどが参加するオンライン授業(社会学概論)でも実施してみた。果たしてこの人数で参加型のワークショップができるか自信がなかったが、始めてみると、学生たちの前向きな姿勢に驚かされた。毎週、授業の数日前に宿題として全履修生にお題となる写真を送り、各自が作品を描いた上で授業の冒頭のアイスブレイクの時間に4人ほどのグループでお披露目をし、質問しあったり、ほめあったりした。

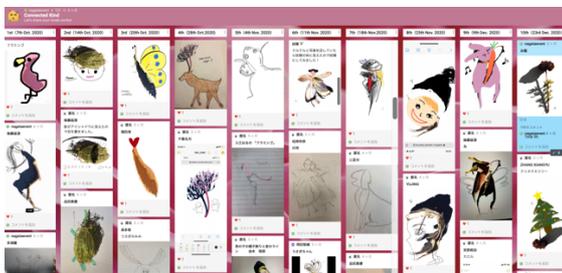


写真 : 50人のクラスで使用した Padlet (一部)

学生たちに感想を書いてもらおうと、ベレーヴィチャ氏の主張する通り、コロナ禍に悩む若者らが自然や感情や仲間と、そして「前向きさ」とつながっているのが分かる。ある学生は「想像力を働かせながら絵を描くというのが毎回本当に楽しかったです。紙とペンで絵を描くことは特に大学生になってからほとんどなかったのでいい経験になりました。」と感想を述べている。筆者はコロナ禍が終息しても CONNECTEDkind で始める授業を維持し、2025年1月現在で1,427ものドロップレットがオンライン上で保管されている。2020年4月から2025年1月までの約4年間で12の授業（授業はいずれも半期（14週間））を履修した延べ874人の履修生がCONNECTEDkindを体験し、作品を残し続けた¹。これらの作品を見ると、誰もがアーティストなのであるというベレーヴィチャ氏の信念は説得力をもつ。

「コロナ禍であるからこそ、周りの人達とのコネクションを大切にしていけることが必要であることをCONNECTEDkindを通じて知ることができました。そして、色々と考えることがある中で、絵を書いている時間はそのことに没頭しリラックスすることができたので感謝しています！」という感想からも分かりますとおり、コロナ禍であったからこそ、その効用はひととき発揮されたようだ。

また、授業ではグループで他者と作品をシェアする時間も設けることがある。次の学生の感想が伝えているとおり、これがすこぶる評判のよい時間となった。

「CONNECTEDkindがあったおかげで、オンライン上でも自然に話すことができました。言葉に加えて絵を見ることで、その人がどんな人なのかより知ることができるような気がしました。CONNECTEDkindが後期の授業の中で人と会話ができる貴重な時間でした。」コロナ禍で1日中、誰とも話をしない、中には全く声を出さなくなった学生もいる。そうした学生にとってアートを通じて他者と交流することはとても貴重な時間だったに違いない。

さらにベレーヴィチャ氏の作品も学生達は見ることがもできる。「ラウラさんの作品は、毎回圧倒させられるものでした。自分の中からは決して生まれえないような捉え方をされていて、作品をみるのが楽しかったです。」ただし、CONNECTEDkindは上手だ下手だとか、正解だ不正解だという学校では当たり前の価値判断とは無縁である。どの作品も愛らしく、個性にあふれていて、グループ内で学生同士がほめ合う場面が毎回、微笑ましかったといえる。

筆者はベレーヴィチャ氏さんとオンラインで定期的にやり取りをするようになり、授業の様子も伝え、大学院生とは直接に会話をしてもらっている。コロナ禍も終息する頃、皆で話をしていた時、コロナ禍での苦しみから解放してもらえたCONNECTEDkindをより広めていくための研究活動を展開できないかと思うに至った。

さっそく学際的なチームを組み、私たちは CONNECTEDkind がコロナ禍のような危機的状況下だけでなく、平時の日常においても試みる可能性があるのではないかという研究上の問いを共有した。本科研費事業「想像力を育む学習に関する学際的研究：CONNECTEDkind の効果測定を中心に」はこうした問いの延長線上に着手された。他者への、特に社会の中の「影」に対してイマジネーションが働かせられるかどうかはコロナ後の世界の平和と持続可能性の鍵だとすれば、その意義を多角的に調べる価値はあると言えよう。

2025年3月に聖心女子大学大学院の招聘によりベレーヴィチャ氏は来日し、大学や小学校で発表や授業、ワークショップを行い、滞在中の3月14日に CONNECTEDkind は5歳の誕生日を日本で祝うことができた。同大学で開かれたささやかな誕生会に元ラトビア大使も駆けつけて下さり、今後の更なる発展を祈って祝杯があげられた。

ベレーヴィチャ氏は縁あって日本語の絵本も出版している。CONNECTEDkind 同様に、本質的に温もりのある作品である。（『春までぐっすり』かまくら春秋社）

https://www.amazon.co.jp/春までぐっすり-文-三木卓-絵-ラウラ・ベレーヴィチャ/dp/4774007641/ref=sr_1_1?__mk_ja_JP=カタカナ&dchild=1&keywords=ラウラ・ベレーヴィチャ&qid=1617253955&sr=8-1

なお、本科研事業の一環として行われた学会発表については次の論考を参考にされたい。

山下恭平、永田佳之、森彩花、水島尚喜、野島雅「自然物とその影を描写する CONNECTEDkind 体験者の脳波分析」(美術科教育学会『美術教育学』第45号, p.231-243.

¹ 履修生の中には欠席者もいるので正確には800人ほどの授業体験者と理解するのが妥当であろう。授業名は聖心女子大学教育学科の開講授業である「人間学習8」「社会学概論1」「社会学概論2」「発展途上国の教育問題1」。このほかにも大学院の授業でも2020年4月から試行してきたので、それを含めると体験者数もドロップレットの数も本文のそれらを上回る。